

藥師堂味噌水米

九斗仕中人略

文治四年十二月十八日乙卯護國寺不斷味噌水始之、每朝七升、夏衆者中清六升、

同十一月十八日己酉、山上味噌水始之、助參沙汰也、以上成清記、

〔沙石集五下〕人之感有歌

又或人ノ句 ヨヒくニモチキミソウヅイトナミテ 是ヲツグ 軒ノタチバナモトツハモ

ナシ サセル句ナラ子ドモ書付侍リ、寫給ベカラズ、

〔南浦文集下〕家業於民不可然、日高墜茗袂相連、糝一椀、萩三束、頭被烟埃、徒送年、贈燒萩墜朝茶

人、

〔醒睡笑二資太郎〕一われは増水のきらひなりとつねにいふ者あり、晚かた増水なかばへきたる、ち

と申さんずれど、おきらひなるまゝ、是非なしとあれば、何とこのぞうすいに胡椒はいらぬか、い

やいらぬ、それならばちとたべふと、

### 乾飯 抄 研入

乾飯ニハ、糲アリ、餉アリ、糲ハ、ホシイヒト云フ、干飯ノ義ニテ、糯米ヲ蒸シテ乾燥セシメタルモノナリ、或ハ粟、黍等ニテ、製シタルモアリ、古ハ兵士ノ糧食、及ビ旅行ノ用ニ供シタルノミナラズ、或ハ日常ノ食用ニ供シタルコトモアリ、各地ニテ製スレドモ、就中河内國道明寺、陸奥國仙臺ノ産最モ名アリ、餉ハ、カレイヒト云フ、乾枯飯ノ義ニテ、其實、糲ニ異ナルトコロ無ケレド、旅行ニハ専ラ餉ト云ヒ、貯藏ニハ糲ト云ヒタルガ如シ、糲ハカタト云フ、カタハ、カリテノ略語ニテ、乾飯料ノ義ナリト云フ、